
バスマジックリン

黒金蚊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バスマジックリン

【Nコード】

N50930

【作者名】

黒金蚊

【あらすじ】

明治おいしい牛乳の望まれぬ続編。
今度は黄色です。

（前書き）

汚いネタになります。あらかじめご了承ください。

“ 明治おいしい牛乳 ” よりおよそ3ヶ月。祖母が決して沈黙することは無かった。それでも日々耐性を増大し、二度と起こることは無いであろうと踏んでいた。だがしかし、遂に私を再度震撼させる事件が起きてしまった。起こってしまったのだ。

再び先に明記しておこうと思うが、これはノンフィクションであり、決して妄想などではない。

ああ、素晴らしき哉。バイトも無く大学もいつも通りサバタージュした私は残り1年満たないであろう、悠々自適な創作ライフを過ごしていた。大学など1年で慣れ、2年でどこまで手抜きを出来るのか試行錯誤し、3年で墮落し、4年で皺寄せを正す。これが私の導き出した結論である。

詰まる所、私は墮落生である。

その様な趣味に生き趣味で死ぬワナビー、つまり、私は流しもしていない汗を洗い流そうと浴室へと赴いたのであった。

冷え性を持ちながらフローリングを踏んでは蹴り飛ばす素足。指先の血液はGW終日の高速道路かの様に滞ってしまっていた。

渋滞を解消しようと、2005年F1アメリカGPの7位が決まるよりも早く脱皮に成功した私は、浴槽の蓋を勢いよく開け放った。

開け放ったものの、私の足先の一向に渋滞は解消されなかった。

脱皮した際にぼやける様になった私の瞳に映っているのは、バスマジックリンの様に黄色い浴槽であったのだ。

私はこの残酷な現実から思わず目を逸らしてしまった。

何故浴槽に溜まった湯が黄色いのであろうか。私の頭に内蔵される低スペックHDが黄色い警鐘を鳴らしながら数時間前の事を思い出す。

「お前ちよつと風呂見て来い」

居間で明治おいしい牛乳ではない飲料物を飲んでいた私に唐突な命令を課したのは我が愚姉。返答は唯一「ハイ、ヨロコンデ」

しかし何故私にその様な命令をするのであろうか。その回答は浴室に近づく導き出された。

何かが聞こえた。

まず得られた事実は、祖父が風呂に入っているという事実。

次に得られた事実は、何やら独り言を現実で呟いているという事実。

私の足は自然と反転し、なにも言えず居間に戻った。

「いや、見てこいって」

「無理無理無理！」

私は死をも覚悟しつつ、大事すぎるので三度繰り返す程必死の抵抗を試みた。

私は畏れているのだ。私も介護せねばいけなくなること。もう十年二十年程は待っていて欲しい。

呆けていなければ生涯を終える時でも数えられるであろう、奇跡的に姉の説得に成功した私は逃げ帰るようにPCに向かい創作ライフに耽ったのであった。

ここまで思い出し、原因と繋がりを持つ点。それは祖父の独り言。

同時に三ヶ月前の悲劇も連想された。

以上の事から、私は浴槽に入るべきではないという結論に至った。

足先の渋滞は一度に解消されることなく、私よりも高い位置から流れる一滴一滴が少し筒解消していくこととなった。

湯船に浸れる事だけが実家で住まう私の幸せであった。最早私が実家に住まう理由は何一つ無くなった瞬間であった。

翌日。私は例によって大学をサバタージュし浴槽と対面していた。私としては家を出ていくか浴槽を洗うかの二択であり、前者を選んでも良かったのだが、半年近く帰ってこない父親にサインも求め愛人宅へ行くのも躊躇われたので後者を選んだ。付け足すならば、無論私は愛人宅の住所など知らないからである。

自然と浴槽を洗う事しか無くなった私は、右手にスポンジブラシを、左手にバスマジックリンを掲げ、森見登見彦先生の文章の様な綺麗さを求め磨き始めたのだった。

途中、玉汗が頬を伝い、私は今日はどつぷりと浸かってやろうと浴槽と力強い握手をした。

バイトを終え、私は帰るなり浴槽へと踊りながら駆け寄った。

疲れが盆休み終日の上り新幹線内部の様に溜まっていたので私は勢いよく浴槽の蓋を開けたのだった。

浴槽は黄色く満たされていた。

私は誰かが入浴剤を入れたのではないかという現実逃避を試した。

しかし、昨日その様な考えに至らない事から明らかであるように、我が家は入浴剤など滅多に入れない。掃除が面倒だからである。

現実逃避は失敗に終わってしまった。

ならば何なのだろう。なぜ浴槽はバスマジックリンの様に変色しているのだろう。

私は本日も浴槽に浸かる事なく、泣く泣く汗を止まらぬ暖かな涙で洗い流すのだった。

また翌日。また大学をサバタージュした私は浴槽と対峙し（以下略）。

昨日と違うのは、本日は祖父がディサービスで風呂に入るので家

では入らないということだ。

もしかすると、原因が明らかになるかも知れない。

明らかになって欲しい反面、想像通りの原因であって欲しくないという矛盾した私の重いが、開けられた。

浴槽反射によって多少青白いだけで、私の求めていた色だった。

私は浴槽に浸り、一呼吸おいてから漏らした。黄色い悲鳴を。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5093o/>

バスマジックリン

2010年10月25日16時52分発行